

「漂流した先で」

大学受験の頃、私が進路に求めていたものは「安定」だった。その思いから、教員免許を取得できる大学に進学し、将来は教員になるのだろうと、漠然と思い描いていた。

大学では、周囲の友人たちが小中高の教員免許取得を目指していた。私もその流れに乗るように教育課程を履修し、二度の教育実習を経験した。実習では、児童生徒が主体的に参加できる授業づくりに頭を悩ませながら、生徒と向き合い成長を支える教員の仕事に大きなやりがいを感じた。ただ、実習を通して、教員の仕事と私生活とのバランスを保つ難しさも感じた。「自分は何十年先も教員を続けているのだろうか」と考えたとき、その姿を思い描くことができなかった。悩んだ末、教員を目指すことをやめた。

とはいえ、教育から離れたいわけではない。大学で学んだことを生かしながら教育に関わりたい。そしてできれば安定した仕事にも就きたい。その思いから、次に選んだのが地方公務員の道だった。地方公務員は、必ずしも自分の希望する部署に配属されるわけではない。教育に関わりたいという思いとは裏腹に、私が配属されたのは、土木や福祉など、教育とは直接関係のない部署だった。もちろん、それぞれの仕事には行政としての意義があり、そこでしか得られない多くの学びがあった。それでも、心のどこかには「いつか教育に」という思いが残っていた。

その思いが実現したのが、唐突に舞い込んできた文部科学省への派遣である。正直なところ、こんな機会が自分に巡ってくるとは思ってもいなかった。振り返ってみると、周囲の流れに乗ったり、思いもよらない方向へ進んだりした先々で得た経験が、今の自分を形づけている。そして、思いがけずたどり着いた文部科学省で、私は改めて「教育に関わる」という原点に立ち返ることができた。これから先も、思いどおりにいかないことや予想もしない方向へ進むことがあるかもしれない。それでも、その先で何が待っているのかを楽しみながら、流れ着いた場所でできることを大切にしていきたい。

(E・K)

